

ガラス

Aブロックにエントリーされた全12作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> にてごらんください。

ふこう
「不孝」

ありがとう お母さん

あなたがとても大事にしていたガラスのコップがありましたね

ぼくがまだ幼かったあとき

それをぼくが割ってしまいましたね

その場にいたあなたは割れたコップには目もくれず

ぼくの体のほうを心配してくれたのをよく憶えています

ありがとう

いままで本当にありがとう…

「…めつどうむしき声香味触法無限界乃至無意識界・・・」

お経は続いた

魔法の鏡

今年晴れて大学一年生になったわたしは東京のあるマンションに一人暮らしをすることになった。大学生になって一ヶ月はたつが、スーパーのバイトのほうはまだなれず、失敗も多かった。気が強くて、でも仕事は不器用であつた私であつたが、そんな私が仕事中に失敗すると、一緒に働いている彼が毎度フォローしてくれた。バイトが終わると彼は私の今日の楽しかったことや愚痴なども聞いてくれた。性格ゆえ彼には文句を言ってしまったり怒りっぽくなってしまうたり散々だったけど、内心では彼の存在が大きかった。

ある日の彼との会話で彼は自分の隣の部屋に一人暮らしをしていることを知った。それ以来、彼とはプライベートでも接するようになった。週末には買い物に言ったり、時々私の部屋で勉強を教えてもらったりして、いつしか生活は生き生きしたものになっていた。

そう、あの日さえ来なければ・・・

彼はなぜか私が彼の部屋に入ることを拒み続けていたが、話で押して、

結局彼の部屋に入れることになった。彼の部屋は本棚に入りきらない漫画が床にも積んであり、倒れそうなものもあつた。これが彼が私を入れることを拒んでいた理由なんだあと考えながら彼がお茶菓子を出している間に部屋を眺めていたら、不可思議かつ想像を絶する光景が目に見え込んだ。壁にかかっている額縁に囲われたものを見ると、私が見慣れている光景がそこに写っていたのだ。そのような絵画であると思つたのだが、よく見ると自分の部屋の壁時計が動いている。そう、これは絵ではなくマジックミラーだったのだ。私の中の決定的な何かが砕け散つた。

あまりにも突然のことではばらく茫然としていた。しばらくしてわたしは彼のなかの知ってはいけないことまで知ってしまった事に気づいた。

もうさっきまでの自分に戻ることはできない。ガラスのように。普段気が強くても心はもろい。ガラスのように。心の中が破壊され人間の形をした不燃ごみになってしまった。

そう、ガラスのように。

サングラスの夢

朝日が昇る中、サングラスは一筋の光を見つめていた

サングラスには野望があった

それは、世界を征服するという途方もないものだった

その野望を叶える為にサングラスはありとあらゆる悪事を働いた

ある時は軍の犬を出し抜き

ある時は少女を誘拐し

またある時は少年を牢屋にぶち込んだ

サングラスは夢へ向かって旅立った

それはとても順調な旅であった

遮るものは何もなく

邪魔なゴミも全て片付けたつもりだった

しかし、最後の最後で世界征服の「鍵」が奪われた

それは、サングラスが少女を見くびったせいであった

その少女は只者ではないと

物語の冒頭で気づいておくべきだったのだ

そう、少女にビンで頭を殴られた時点で――

「目があつ、目があああああああああつつ!!」

茶色いサングラスと共にサングラスの夢は散った。

バス通勤

最寄駅に着くと、会社を出た時よりも雨が強まっているようだ。会社から駅までは社内売店で買った新聞で凌いだが、自宅までは自転車です十五分。今日はバスで帰ろう。

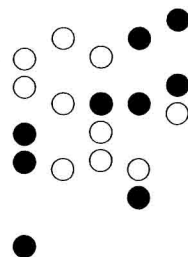
バスはそれほど混んでおらず、二人がけ席の窓側に座り叩きつける雨粒を眺めてながら、ふうと大きなため息をついた。

その時、何かが窓ガラスに浮かび上がった気がした。なんだろう。もう一度、息を吹きかけてみる。すると、文字が浮かび上がってきた。窓が曇っていた時にここに座った乗客が書いたものだろうか。

上 0 0 + 0 0 0
円 0 8 ふ 6 8 8
人 5 4 す 2 9 4
工 9 6 す 5 2
車 1 3

何かを計算した後。数字以外はぼやけてよく読めない。書いた本人がいないため何の数字なのかはわからない、しかしわからないとなると余計に気になる。空調が入っているため、徐々に落書きは消えていく。…昨日後輩のRが持っているのを見て価格を調べたPSPが三万円くらいだけ。そんなことを考えているうちに自宅から徒歩十五歩の停留所に着きバスを降りた。窓の下半分に少し落書きをしてから。

翌日も雨だった。傘をさせば自転車で駅まで行けるが、毎時二本のバスに丁度間に合いそうだったのでバスで行くことにし、停留所へ向かった。バスに乗り込み昨日と同じ場所に座ると、今日は空調があまり効いていなくて窓は曇っていて、昨日とは違う落書きがあった。



なんだろう、囲碁の対戦でもしていたのだろうか。囲碁のルールはよく知らないけど、曇った窓では黒を白に戻すのが大変だから、オセロではないんだろう。転職前の会社の囲碁好きだった上司Tさんの顔が頭に浮かんだ。私と同期のB君がTさんの後継として頑張っているのだそう。…都会の便利さに慣れると田舎には戻れないって言う人がいるけど、田舎に慣れるともう東京には戻りたくない。たしかに、家から徒歩十五歩のところにあるのが毎時数本のバス停よりも、コンビニのほうが嬉しいんだけどね。

雨は夜になってもやまず、二日連続でバスに乗って帰ることになった。会社への申請通りに通勤したというだけでいいことをした気分になる。お裾分けで大量にもらったキリタンポを抱えバスに乗り込むと、朝とは違って窓は曇っていなかった。昨日と同じように息を吹きかけてみた。

田中

れいな

横手市 大鳥

書かれて時間が経っていないのか、今までよりもくつきりと文字が浮かび上がった。小学生か、それよりも小さい子供の書いたものように、右は名前では左は…地元の名地名だから住んでいるところなのだろう。

…あれ。よく見ると、「鳥」の線が一本足りない。漢字を習っていないのに見よう見まねで落書きをする幼い子供の姿が思い浮かぶ。書いた場所が窓「ガラス」だから、わざと「大鳥」ではなく「大鳥」(オオガラス)にしたのかな? …さすがにそれはないか。

女が王室舞踏会

を抜け出す

昨夜、王室主催の勉強会が開かれた。その中で催された舞踏会を途中で抜け出す女性があり、その祭に女性はガラス製の靴を落としていった。現在もその女性の行方はわかっていない。目撃者によると、女性は20代前半で長い金髪のやや長身、白いドレスを着て、宮殿にはカボチャ型の馬車で来た模様。今朝、王室が会見を開き、捜査員250人を動員し、全力を尽くしてその女性を捜し出すと宣言した。

1 2 月 2 6 日

逃走女はB型

王室広報によると、ガラス製の靴から微量ながら女性のものと思われる汗を採取できたと発表。検査の結果、血液型はB型、年齢は20代前半と推定される。また、近くの森ではその女性が逃走したときにできたと思われる足跡が複数発見された。

1 2 月 2 7 日

逃走女発見か

王室広報は今日の正午ごろ、城下町に住む女性(19)から任意で事情を聞いていることを明らかにした。

1 2 月 2 8 日

城下町の女性を詐欺容疑で逮捕

王様、異例の声明発表

同月25日に起きた王室主催の勉強会で催された舞踏会を途中で抜け出した女性が、城下町に住む19歳の女性と判明した。その女性に参加費(15万円)を支払う午前零時前に城を抜け出し、逃走。女性は動機について、「どうしても王子様に会いたくてやった。魔法でドレスや馬車を出してもらった。本当にすまないことをしたと思ってる。」と反省している。公安委員会は参加費が支払えないのを知りながら参加した悪質な犯行とし、詐欺容疑で立件する予定。また、魔法についても詳しく追求

法曹界は一斉反発

し、その魔法使いも詐欺幫助の可能性があるとしている。

またこのことに対し、王室は「今回の騒動は、ひとりの女性の社会性に欠ける極めて遺憾な行為によるものであった。」と声明を発表した。

一方、弁護士会はこの逮捕を国家権力の濫用とした上で、資金集めにすぎない勉強会の意義を追求する方針。さらには、女性を守る会も近く結成する。

スクラップを通して、この事件の背景には貴族と庶民の経済格差によるものと感じました。

1 2 月 2 9 日

シンデレラストーリーへ命取りはガラスのくつ

アフターケア

さとこ ねえ、シンデレラってあるじゃない？

ゆたか ああ、それがどうしたんだ？

さとこ あのガラスの靴って12時過ぎてもずつとそのまま残
ってるよね？？魔法が解けたんだから、他のものと
いっしょに元にもどつてもいいんじゃない？

ゆたか そー言われれば、そうだよな。もし元にもどつてたら
王子とは結ばれなかったわけだし。靴だけ別つてのも
よくわかんないな。
でも、いきなりそんなこと言うなんてどうしたんだ
よ？

さとこ 別に・・・ちよつと気になっただけ。
じゃ、行こう。

そう言つてさとこは俺の手を引いて駆け出してつた。
さとこはついこの間出会ったばかりである。きつと川におぼ
れてたハトを助けたのを神様が見てくれたんだな。
けど、さとこは最近なんか元気がない気がする。

この間の魔女もう一度現れないかしら・・・彼に近づきたくて
ハトにしてもらったけど、背中が羽毛が治らないなんて・・・

ガラスの心

もし…

ガラスのように透き通った…外から丸見えの心を持っているとしたら…

俺「あ、あのさー、今日の放課後、暇？体育館の裏で待って欲しいんだけど、いいかな？」

俺の心(まずは待ち合わせしないとね。このあと告白するから、絶対来て欲しいんだけどなー。)

かがみちゃん「おめー、告白するの？嫌だわ。」

かがみちゃん「おめー、今日、用事あるから。」

告白でOKをもらう以前の問題が発生する。「あたって砕けろ！」の『あたって』の部分すら成し遂げられないのである。これではつまらない青春だ。青春は挑戦と挫折があるからこそおもしろい。

逆に…

この世の全員が俺に対して丸見えの心を持っているとしたら…

俺の心(手紙で呼び出されたけど何だろ。あー居た居た。)

俺「おめー、待たせた？」

あきらちゃん「いえ、そんなことないです。あのー、先輩！好きです。付き合ってくださいー」

あきらちゃんの心(別に好きじゃないけど彼氏居ないのは嫌だし、こいつくらいなら、まあいいかな。早く返事しろよ。)

少しくらい淡い期待をいだかsekuleてもいいのに、これでは悲しすぎる。女性の怖さが丸見えで、女性の美しさを直視することすら危ぶまれる。このままだと待っているのは現実逃避の裏の世界である。

そう…

心は勝手に誰にも伝わらないからこそ…

万年氷

小学校の時のことだっただろうか？ある日、学校に行ってみたら黒板の隅に小さな落書きが描かれていた。まあ、学校ではよくあることだ。けど、その落書きが特別だったのは、その後だった。クラスメイトが少しずつ落書きを付け加えていき、日に日に新しく生まれ変わっていく。いつしか、クラスのマークのようになっていた。

万年氷と呼ばれるものが俺達の町にはある。実際は万年氷なんていうのは名ばかりで、巨大なガラスの台座を氷に見立てているだけだった。

「少しだけ、見に行きませんか？」

そんな万年氷を見に訪れたのは、他でもない、彼女に誘われたからだ。去年の祭りの時、万年氷は舞台として使われていて、俺達はその上に立っていた。思い出がそこにあるかと聞かれれば、確かにある。彼女はそれを見に行こうといった。

「ほら、着いたぞ。」

普通の日に改めて見るそれは、いつかの神秘的な雰囲気を使い、ただ巨大なだけのガラスに見えた。

「こちらで一緒に。」

彼女に誘われて、俺も万年氷の方へ近づいて行く。彼女の言おうとしていることは分かっている。俺達はもうすぐこの町から離れて、別々の道を歩んでいく。最後の思い出の舞台を心に留めておきたいのだろう。

「しかし、随分とボロボロになってるよな。」

俺は何を話しているのか悩んだ末に、万年氷の傷ができて白くなっている部分をなぞりながら、そんなことを言った。

「ガラスに傷がつくと、ガラスの価値は下がると言われますけど、ある人にとってはその傷が何にも代えがたい価値になることもあると思いませんか？」

「確かに俺達にとっては足跡なのかもしれないけどな。」

そう思ってしまうと今まではただのガラスにしか見えなかったものが特別なものに見えてくるから不思議だ。

「少し思いついたことがありますて……。」

そう言うとき彼女は手に持っていたライトで万年氷を照らした。すると、傷のできている部分で乱反射して、不思議な文様を形作った。

「歴史ってこういうものだって、そういう感じがしません？」

俺は自然とうなずいていた。

一人一人がまったくバラバラの線を描いていく。だけど、その線はそこに携わった人だれもが意図しないところで、歴史という一つの絵を描く。いつかの落書きのように。

だから、と思う。ガラスが傷つきやすく儚いなんて言ったのは誰なのだろう。ガラスは傷のせいで価値を下げはしない、記憶を受け止めて歴史を刻んでいるだけなんだ。

ガラスの家

父が不動産屋に行ってきた。今まで借家暮らしだったが、ある程度金が貯まったから家を買うらしい。

「ただいま。すつごく良いところ見つけたよ!」

父は帰宅と同時に僕と母の前でついさきほどまで説明を聞いていた物件について話し始めた。

どうやらその家は、以前住んでいた家族が突然行方不明になり、長い間そのまま見つからなかったもので、その親族が諦めて売りに出した家だと言う。

「値段が格安でさ。しかも立地条件も申し分なし!」と父は嬉しそうに語る。確かに、この価格で駅から歩いて二分なんて普通じゃ考えられない。

三日後、不動産屋に連れられて、僕ら家族三人は初めてその家を見に行った。しかし、家に徐々に近づいていくにつれ、妙な違和感を覚え始める。

「ガラスだ。」僕は不意に言った。

その家には通常の家屋にある壁はない。家の材質は全てガラス。二階建てでベランダまでついている。普通に考えれば素晴らしい家。しかしガラスの家だ。

「なんか変な家ですね。」と父は言った。

「ええ。でも、周りに人はほとんど住んでいませんし覗かれる心配はしなくて大丈夫です。」

確かに不動産屋の言うように、こんなに駅の近くなのに、なぜかその家の周りだけ僕ら以外の人影がない。

「うーん。まあ慣れれば気にならないのかもしれない。カーテンとかつければ外からも見えないうし。」

よし、この家に決めます。」と父は言った。

引越しはその五日後だった。僕らは普通に暮らしている人なら絶対に所持しないであろう枚数のカーテンを買い込み、その家へ向かった。

幸い、買い込んだカーテンで風呂やトイレ、そして家の周りは隠せたので、生活に不自由はしそ

うになかった。

「明日からの暮らしが楽しみな。」父は嬉しそうに言った。

ガラスの家に引越してから一ヶ月余が経った。思っていた以上に何の不便もなく暮らせていた。

ただ、一つだけおかしいことが起きた。父と母が異常にガラス製品にこだわる様になったのだ。コップや皿はもちろんガラス。フォークなどもわざわざガラスで出来たものを発注していた。理由を尋ねると

「だって、その方が美しいじゃない。」と返事をされた。確かに僕もそう思った。

ある夜、大きな地震で目が覚めた。キッチンの方でガチャンガチャン何かが割れる音がしていた。当たり前だ。あれだけガラスのものが多かったら割れないほうが不自然だ。地震がおさまリ、僕はまた眠りに就いた。

次の日の朝、目が覚めると何かがおかしいことに気づいた。家族の気配がない。一階も二階も探したが、あるのは昨日の地震で割れたガラスだけ。やはりキッチンでかなりのガラスが割れたようだ。外を探してみようと戸を開け、外に出ようとしたり、あわてていて、足元に段差があるのを忘れていて、つまずいて前に倒れてしまった。

ガシャン

何かが割れる音。今度は何が割れたのだろう。

あれ 僕の脚がない 胸がない 手がない
あるのはガラスの破片だけ。

ああそうか

行方不明ってこういうことか

心の次は体が支配されるのか

薄れていく意識の中で

僕は昨日の夜、父と母がキッチンで何をしていたのかを考えていた。

「僕だけが知っている。」

触れなければ、良かった。遠くから、見ていれば良かった。

僕は知っている。氷室硝子。常に左目に眼帯、右手に手袋をつけている。海賊、などと遠巻きに呼ばれていたことも昔はあったが、今はそれすらない。誰も彼女に近づけない。僕だけが知っている。彼女は美人だ。

透き通るようなきめ細かい肌、なめらかな輪郭。眼帯に隠れて誰も気づいていない。そんな彼女を遠くから見ていた。退屈そうに教室を眺める瞳。誰も彼女に近づけない。彼女のそばだけ、音がなかった。

なぜそんな事をしたのだろうか？声をかけてみた。不愉快そうな瞳。理由なんてわからなかった。まあ、恋とはそういうものだ。

一週間。「なぜ近づいたの？」君がとても綺麗だったから。本当のことなど言えるわけもなく、「別に」と口にし、つまらなそうに僕を見る瞳から目をそらす。視界のはずれで彼女が笑った気がした。

ヴェニス of 商人の鉛の箱。攻撃的な姿と言葉で近づくものを拒絶する。でも、その中身はとても美しいもの。鉛の拒絶すら受け入れられる懐の深い者にだけ与えられる、とてもいいもの。デートに誘った。

当たり障りのない会話で日の時間は過ぎ、夕暮れ。二人だけの公園で、彼女は眼帯を外した。突き刺さったガラス片。「こんな女でも、好きになってくれるの？」挑発的に、高圧的に、意地悪く、すべて剥き出しにしたノーガード戦法。「好きだよ。」だからこそ、受け止めなくちゃと、そう思った。彼女は見せたことのない穏やかな微笑みを浮かべ、白く美しいありのままの右手を差し出した。「握手。」僕が伸ばした右腕を彼女は力強く握った。握りしめた。指の間から滴り落ちる僕の血。「皮膚にめり込んだガラスは永遠に抜けないの。」ネコ科の獣の攻撃的な微笑み。僕は逃げ出した。

月曜日。「昨日のお詫びを言いたい。放課後、校舎裏に来て。お願い。」すぐるような瞳と悲しげな微笑み。日曜日に感じた恐怖はそこにはなかった。僕は、彼女が好きだ。

校舎裏。壁に押し付けられた僕の体。首にかかる彼女の右手。獣の右目と煌くガラスの左目。呼吸ができない。「私のこと、好きなんでしょ？愛してるんでしょ？」何も聞こえない。彼女の声だけが脳に響く。意識が飛ぶ間際、彼女の唇が僕の唇に重ね合わせられ、そして、彼女の湿った舌が、僕の中に侵蝕してきた。

やがて解放され、ぐったりと彼女にもたれかかる僕の耳元に囁く声。「逃がさない、絶対に。」

美しい、緻密で繊細なガラス細工は、一度触れると、容易く砕け、触れようと伸ばした憐れな愚者の手を容赦なく傷つける。気づくとは傷つくこと。僕は彼女の正体に気づいた。僕だけが、知っている……

ガラスの向こう

珍しく二連休が取れたので、家でギターを弾いていた。明日は何をしようか。彼女と食事にでも行こうかな。そんな事を考えていると、君から電話が来た。なんでもいつもタイミングがいいんだろな。

「今日の夜暇？予定無かったらうちでご飯食べよ！」

外をみるとガラスの向こうの空は青く、太陽は初夏とは思えないくらい眩しく輝いていた。

「今日は予定が無いから、七時頃には行くよ。」

マイペースな君の明るい声がいつもより躍動していた。今日は何かの記念日だったつけ：カレンダーを見ても何も思い出せない。ま、君は記念日を忘れたからといって怒る訳ではないけどさ。

通り雨の後の街並みはどこか騒がしく、水たまりは太陽をオレンジ色に映しだしていた。

君の家に着くと、パスタの良い匂いがした。機嫌がいい証拠だ。

「今日は何かい事があつたの？」

「私が飼ってる小鳥がね、ちよつと前に卵を産んでね、今日見てたら雛に孵つたんだあ。」

彼女はベランダの鳥かごを指した。生まれたての命がそこにはあつた。

「人生って不思議だよ。あの子が産まれる事が決まつたとしたら、私の行動であの子の運命は決まっちゃうんだもんね。」

「そうかもね。それは僕たちがいつか、今の僕たちを思い出した時にも同じ事が言えるんじゃないかな？」

ガラスの残りのワインを飲み干し、パスタを食べた。君は普段お酒を飲まないからか、もう赤くなっていた。君は小鳥を見ていて、僕もベランダの方を見ると、ガラスの向こうの鳥かごの上の方に、三日月が輝いていた。

気づいたら朝になっていた。君が隣で寝たからそのまま寝ちゃったんだっけ。無意識に君を探すと、君は小鳥と一緒に微笑んでいた。

ガラスの向こうのその笑顔は、昨日見た太陽や三日月よりも眩しく、輝いていた。

Seize the night

私はリストカッター。あ、勘違いしないで。自分の手首を切るなんて変人と違って、私は他人の手首が専門よ。ずっと私思ってた。こんな灰色の世界の中で生きてるって言える？ つまらない私、つまらないあなた、つまらない世界。

でも私あの日、男に手首を切られて死んだ妹を見てから、こんな世界に色を塗る方法を見つけたの！ それがリストカッター。手首から湧き出る赤は、凄く綺麗に私とあなたと世界を彩ってくれるわ！

そして、その綺麗な絵の具にふさわしい絵筆はなんと言ってもガラスの破片。色々試したんだけどね、ナタもチエーンソーもノコギリも、あのガラスの破片で血管を削る感触には敵わない。

そんな私にも一つ悩みがあったの。確かに私と世界は少しずつ彩られていくんだけど、肝心のあなたは綺麗になってもすぐにお別れ。どこかに手首を切っても平気な人いないかなあ。

そして悩みを抱えながら進学した大学で、私は運命の人に出会った。私が色を塗っていないのに灰色じゃない彼と。ああ、あの人に色を塗ったらどんなに綺麗になるのかな……。

私と彼は惹かれあい、やがて付き合う様になった。今日は初めてのデートの日。私は精一杯のおしやれをしてデートに臨んだ。普通の女の子みたいに彼と一緒に映画を見て、ご飯を食べて、ショッピングをした。夢の様な時間は瞬く間に過ぎ、別れの時、夢が終わる時。そして、**最高の現実が始まる時。**

私と彼はキスをした。夜の人気の無い公園で。彼を感じる熱いキスを。彼の背中に添えた私の手がゆつくりと

彼の肩に、

彼の腕に、

そして彼の手首に――

チンツ

澄んだ音が私と彼の手の内で鳴った。それは私のガラスと彼のガラスのキス。ああ、やっぱりこの人もリストカッター。彼を彩る絵の具も、きつと私のと同じだ。

お互い後ろに飛びのいて、私と彼は微笑みを交わした。圧倒的な連帯感。ああ、やっぱりこの人は運命の人。だから。だから、もつと彼の綺麗な姿を見たい！

私と彼は激しく激しく踊った。二人のガラスは夜を切り裂く。二人の絵筆は夜を彩る。今の世界はとっても綺麗。私たち最高だ。そして、ついに彼の絵筆が私の手首を撫でた。私の手首から湧き出る赤。

私が後ろにゆつくりと倒れる中で見えた最期の景色。彼のガラスにかすかに映った、私の絵の具で赤い私。そして、その横にたたずむ綺麗な赤の彼はこう言った。

「愛してる」

ふふっ

「知ってる」

コンテスト結果				
[Aの部]				
コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	不孝	2 pt	8 位	0 sp
		タイトルの重さがシンプルな言葉の連なりのなかから、じわっと滲み出てきます。 孝行をしたい時に……ということわがが脳裏をよぎったり。 ちょっとシリアスなテーマだけに、これくらいの文字数がかえってさりとちょうどよくて、表紙作品となりました。		
A02	魔法の鏡	0 pt	10 位	0 sp
		壊れたまま、不燃ゴミになって呆然と終わるラストが余韻があって、いいなあ。これでガラスの破片を手に復讐に向かったりしたら、ただのドタバタですもん。 マジックミラーは何かの暗喩としても読めそうです。 ただ、彼のキモチが謎です。部屋に入れたらマジックミラーがバレるって覚悟の上？ そのあたりが合理的に説明されていると、より悲劇性が盛り上がったかな、と思います。		
A03	サングラスの夢	14 pt	2 位	8 sp
		わはははは。 あっ、「バルス」だっ！ て気づいて読み返して2度楽しい。じょうずに伏線を張ってあるだけに分かった瞬間、織り込んだネタのひとつひとつがいっせいに弾け散ります。その破壊力たるや、バルスさながら。みごとヒットでしたね。パックマンに続いて、またまた楽しませていただきました。 でも、ご存知でしょうか。お茶会で「乱入成功率100パーです」と作者さんがのたもうた瞬間、TA陣に走った殺気を。。。特別賞：目が賞(インパクト) /金曜ロード賞(班員のツボに入った) × 2 /ムスカ賞 × 2(気づいた時のうれしさがよい) /ラピュタ賞 (Latestな話題だから) /ジブリ特別賞 (名言) /わかりづらいで賞(ラピュタだって、わからない) イチオシフレーズ：「目があっ、目がああああああああああっ！！」 × 8 いやはや、最多特別賞とイチオシフレーズ大賞もあっさり攫ってゆきました。		
A04	バス通勤	4 pt	7 位	0 sp
		バスの中の窓の落書きという設定が、とてもユニークで、暗号めいた消え残りメッセージが好奇心をそそって、すてきでした。基本ほのぼの、ちょいミステリアス風味といったところでしょうか。 で、そのミステリー部分、電卓で足し算してみたんですけど、解けないなあ。うーむ。解説希望！ イチオシフレーズ：「（暗号っぽい基石）」		
A05	シンデレラストーリー～命取りはガラスのくつ～	33 pt	1 位	3 sp
		これまた技巧派の逸品です。 架空の世界の小学生のスクラップといった趣向でしょうか。シンデレラ・ストーリーが、いかにも新聞らしく、社会の格差攻撃にまでつながったところが爆笑&哲学、すなわちおもしろくて、かつ深い。すばらしいです。 圧勝首位もナットク、おめでとう!!! 特別賞：レイアウトいいね賞（新聞ぽいのがざんしんで日づけのてがきかんもいいね）/レイアウト賞（うまい、よみやすい）/新聞賞（発想のよさ） イチオシフレーズ：「逃走女はB型」「本当にすまないことをしたと思ってる」「城下町の女性を詐欺容疑で逮捕」		
A06	アフターケア	0 pt	10 位	1 sp

		魔女さん魔女さん頼みます。天使の羽根のつもりかもしれないけれど、これはちょっとかわいそう。 当人にとっては深刻かもしれないできごとを、ふうわり絵本風味で包んだところが作者さんのやさしさのあらわれ、と読みました。 特別賞：「A-5のアフターケア章」（A-5とセットで見るといい!）		
A07	ガラスの心	11 pt	3 位	0 sp
		見えても、見られても、やっぱり困るよね、という結論が、告白シーンを二つ並べることで分かりやすく伝わってきます。字数も揃えて構成も工夫されてますね。 さらに選択肢を増やして、お互いびみょ〜なのに引くに引けなくなってしまう、とか、両思いなのにダメダメの展開になっちゃう、とかいろんなケースを並べてみたら、またおもしろさがふくらんだ気がします。 3位おめでとう。かがみちゃんとあきらちゃん(双子?) によろしく。		
A08	万年氷	8 pt	4 位	0 sp
		傷が付く、という弱点をくると反転させて、歴史を刻むことこそガラスの良さ、と位置づけるラストメッセージが、ライトで照らされた氷の反射さながら、あざやかに心に刻みつけられます。きれいな光景を連ねるだけでなく、メッセージ性を宿したところが良さでした。 ひいちゃん、再び。そう、きっとこの「彼女」は19歳になったひいちゃんですよ！ イチオシフレーズ：「ガラスは傷のせいで価値を下げはしない。記憶を受け止めて歴史を刻みたいだけなんだ」		
A09	ガラスの家	8 pt	4 位	0 sp
		人がガラス化してしまうホラーハウス。くっきり真相を見せないところが、より怖さをそそります。すべてを説明しきったらかえって興醒め。そのあたりの匙加減が絶妙でした。 だんだん巨大化してったりするのでしょうか、こいつは。		
A10	「僕だけが知っている。」	8 pt	4 位	0 sp
		ホラーモノその2。ガラスの女は刺す女。猫科の攻撃性が描写から漂ってきます。こちらもホラーハウス同様、完全には正体をあらわさないところが怖さでした。 イチオシフレーズ：「皮膚にめり込んだガラスは永遠に抜けないの」		
A11	ガラスの向こう	0 pt	10 位	0 sp
		ワインにパスタ。小鳥に三日月。しあわせ満開、朝日がまぶしい。 いや、それ都合よすぎだろ、どーせ……なんていうバッドエンドを期待する汚れた心をさらっと交わして、ハッピーにまとめていただきました。おしあわせに。		
A12	Seize the night	2 pt	8 位	3 sp
		出たあ。作風ジャ〜ック。もののみごとになりきって。TA陣も大さわぎ。もう爆笑するしかないですね。 まあ、そうしたこの場属性の熱さはさておいて。 作品単体として見ても、チンッ、からあとのドライブ感、最高でした。フラメンコさながら、血のダンスを熱く熱く踊って。 人と人とが愛し合い、傷つけ合うって、たぶんこういうことなんだろう、なんていう思いに誘われる、あざやかなイメージ造型でした。特にすごいと感嘆したのは「知ってる」というラスト・フレーズです。なまなかなことでは出てこないセリフでしょう。女って恐いわ、うん。 思いのほか得点が伸びなかったのは、なぜなのでしょうね。 特別賞：血が大好き（はぁと）賞(怖いから) /続編賞(印象が強い!) /出血大サービス賞（うまい!!!） イチオシフレーズ：「私はリストカッター」		

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	強さ	0 pt	12 位	0 sp
		ガラストーク。友人同士の親密な気分は出ていますが、ちとお題にこだわりすぎたか。 ラスト、問いかけで終わるのは良い工夫で、ずっと相手の気持ちを引き寄せつつ、次をめくりたくなる今週の表紙作品でした。		
B02	ある一室	11 pt	3 位	0 sp
		今回、心をガラスにたとえた作品はとても多かったのですが、多重人格へ行ったところがユニークでした。説明がくどくないのも好印象。 ただ前半、このままだと普通のドラマなので、男も女も全員が同じ顔してる、こいつら何者？ のような、何か不気味さを加えるとより盛り上がったのでは。 ぎっしりの力作が並ぶBブロックで、常連さんをさらりとかわして3位をさらいましたね。おめでとう。		
B03	ガラスケース	2 pt	6 位	0 sp
		はい、ごちそうさま。 そうですか今日びの若いオノコは、レシートで告白なんて、まだるいことをするのですか。日本も……(以下略) でもまあ、恋のはじまり、おずおず感はどこでもこんな風ですよ。		
B04	夏幻の月	2 pt	6 位	2 sp
		観覧車。二人で乗って一人で降りてきたら、係員さんビックリなのでは？？ そんなよけいな心配をしてしまうほど真に迫った描写でした。銀の月、白い手、幽霊は空へ帰る。幻想的に魅了されるなか、ネックレスという小道具がちょっと浮いてた気がします。 特別賞：作者の顔が見てみたい賞(作者が男だったら…) / 意外賞(最後に女の子の正体がわかったとき感動した)		
B05	ガラスの靴	2 pt	6 位	1 sp
		幸せには必ず犠牲がともなう。 そんなたいせつな人生訓を、こんなにも分かりやすく伝えてくれた作者さんに感謝。小学生の妹さん弟さんがいらしたら、お伝えくださいませ。 特別賞：幸せの代償(全体的に残念だから) イチオシフレーズ：「マメとムレによる水虫」		
B06	ガラスのおっちゃん	27 pt	2 位	5 sp
		ガラスという、透明で脆くて冷たいモノから、思い切り対極にイメージを飛ばした、その発想力に乾杯です。おっちゃん濁ってるし、おっちゃんたくましいし、おっちゃん熱いし。作者さんのナマの声、聞いてみたかったのに残念。 特別賞：鼻毛賞×3(面白い、おっちゃんのキャラは無敵!!!) / おっちゃんで賞(とにかく発想がすごい) / 意味不賞(おっちゃん的人格があたたかい) イチオシフレーズ：「うっさいボケェ」×2 「ピカチュウが入ってんねん」×2 「ホントは女子テニス部が良かったんじゃボケェ」「ルル毛」「ダイヤモンド付着率6割3部3厘」 首位こそ鼻毛差で逃したものの、鰐を振り切って最多特別賞、そして7班制覇で最多イチオシフレーズでした。おめでとう！！		
B07	硝子の鰐	29 pt	1 位	0 sp
		うまいなあ！ 会話でコンパクトに状況を説明し、一人称トークで現場の緊迫感を感じさせ、盛り上がり切ったところへいきなり「きいこきいこ(以下略)」 テンションの高さが一挙に崩れて効果絶大、大爆笑。なんだかこちらまで聞こえてくるようで、箒に乗って逃げ出したいくなりました。 乱入失敗歴n回、本選初登場を首位で飾れて、おめでとう!!! イチオシフレーズ：「きいこきいこきゅここきゅかきゅかきゅかきゅ」×4		
B08	選択	6 pt	4 位	4 sp
		うーん。書き過ぎですし、ストーリーありきたりですし、なぜに今さら、こんな王道SFを？ マザーコンピュータが世界を支配なん超定番ですよ。文字数の極致に挑戦したかった、とか？ 昇る唐揚げを知ってしまった私たち、歌がなくちゃヤダ～、とまでは言いませんが、なまなかなレベルではナットクしがたいのであります。 特別賞：とてもがんばったで賞(すごく長かったから。よくがんばりました) / SF見すぎ賞(ターミネーターパロディ) / おつかれさまでした賞(この文章量はスゴい) / 正統派小説賞(長いけどまとまった小説だった)		
B09	研究者の手記	1 pt	11 位	1 sp
		おお、リッパリッパ。超人の死から、しかと学びましたね。 マキロン超人。ネタに見せかけて、ラストで「白紙」に語らせたという変身ワザがあざやかに決まりました。うーん、もっと上に行ってもいいのになあ。鰐に阻まれたか？ でもマキロンはヒットした模様です。 特別賞：マキロン賞 イチオシフレーズ：「マキロンありますか？」×3		
B10	記憶	6 pt	4 位	1 sp

		炎の揺らめきって、どこか懐かしさを誘いますよね。そんな体感をベースに、熱さと火の色を感じさせる工房という舞台と、情熱ときらめきを感じさせる「彼の眼」がきれいにシンクロして、情景がしっとりと心に届きます。 特別賞：おしかったで賞(期待通りの展開)
B11	夏の幻影	2 pt6 位1 sp
		つかの間、浮かぶ過去の幻影。それはアスファルトの道路に浮かぶ逃げ水にも似て。 追えども戻らぬ過去への哀惜が、具体的な少年の形をとって伝わってきます。 抽象的なイメージが続くので、途中で読者が(少なくとも私は)飽きます。もう少しシンプルでも良かったのでは。 特別賞：団塊のおっさんの気持ちがよく表れているで賞
B12	—fairy—	2 pt6 位0 sp
		ラストは妖精さん、よろしく。 湖に棲まうフェアリー。少女の夢。おとぎ話のふうわりした味わいが、とても良く醸し出されています。 せっかくなので、光の反射シーンをもっと具体的に描き込むなど少女視点により近づけると、ファンタジー気分がもっと増したように思います。 しずかな終わり方、ラストに置くにふさわしい作品でした。